

使徒言行録 28章 1-16節

『つまずきをこえて』

長いあいだ読み、聞き続けてきた使徒言行録も最後の章を迎えました。パウロはローマでの伝道を願いつつ、エルサレム教会との絆を深く思い、ローマに行く前にあえてエルサレムに行き、そこで逮捕拘束され、二年もの間エルサレムで拘留されました。パウロは皇帝に上訴することを願い出て、その結果ローマに護送されることになり、他の数人の囚人と共に、船出し、海路でローマに向かったのです。途中に嵐にあったり、暴風に悩まされ積み荷を海に投げずてることになったり、漂流したり、最後には船そのものが難破し、泳いで上陸するというようなさまざまな困難を経、マルタ島と呼ばれる島に辿り着いたのです。パウロをはじめ、多くの人々はこの島にしばらく滞在し、ここで冬を越し、ローマに向かい、いくつかの港に寄港して、ついにローマに着いたのです。思えばそれは長い長い、旅でした。

確かにパウロという人の歩みなのですが、考えてみるとここには、わたしたちが人生という旅の途上で経験することが描かれています。嵐に出会ったり、暴風にあたり、持っていたものを手放さなければならないような経験をしたり、漂流もします。盤石だと思っていたものが船が難破するように崩れる、溺れそうな海の中をまさに五里霧中でアップアップしながら泳いでいく。みんな私たちの人生に大なり小なりあることです。

しかしパウロは、そのような中で、神のみ声に聞きつつ、従ってきた。神の言葉に聞く人は、ときに周囲の人が驚くような決断もした。三度の伝道旅行の後にエルサレムに行く、というのは、周囲の人たちから見て、迫害に遭いに行くようなものだったのです。だからみんな反対した。だが彼は人の意見ではなく、神の意志、み旨に聞いて、エルサレムに行った。そして案の定、苦しみの中に置かれた。しかし彼はその現実を受け入れていた。もともと自分の損得でエルサレム行きを決断したわけではなかったから、自分に損なことが起こっても、後悔もないし、判断ミスだったとも思っていなかった。むしろ、この現実の中で、神から示されるもの、与えられるものがあると思っていたし、神はこのわたしを何らか神の器として用いてくださる、という信仰があったのだと思います。

マルタ島でのいくつかの出来事が28章には記されています。

島の住民はパウロたちを温かく迎え入れてくれました。降る雨と寒さをしのぐため焚火を焚いてくれたのですが、その時一匹の蝮がパウロの手にからみつき噛んだ。その様子を見た島の人たちは、この人は人殺しに違いない。幸運にも海難から逃れてこの島に到着したけれど、こうしてすぐに蝮に噛まれるということはきっと悪いこと、しかも人殺しのような悪いことをしたに違いない、と島の人々は思ったのです。迷信的なとらえ方だと言えるかもしれませんが、その時代、その場所での強い信仰のようなものだったのでしょう。ところがパウロはその生き物を火の中に振り落とし、全く平気。パウロのいのちは守られたのです。じっと様子をうかがっていた島の人々は、こんどは「この人は神さまだ」と言い出しのです。毀誉褒貶、けなしたり、ほめたり。

人殺しだ、神さまだ、というような経験はないかもしれませんが、わたしたちの人生も毀誉褒貶には取り囲まれている。わたしたち自身が人のことを安直に評価したり、その時の気分で批判したりするわけですから、逆にさまざまな人からの毀誉褒貶に取り囲まれるのは当然なのかもしれません。噂を含め人の評価は気にしないとつい、悩まされることもあるのです。パウロも人々のさまざまな評価、批判、陰口、そしてときに陰謀にまさに取り囲まれていた。逆に、人々の側からすれば、パウロにつまずいていたのです。人殺しだ、というのもそういうことです。この人は悪人だ、というつまずき。神さまだ、というのも誤解です。けなしても、ほめても、誤解です。そして誤解に取り囲まれることほどわたしたちの人生でやっかいなことはない。それは誤解ですよ、ということのなんとめんどくさいことか。うんざりするような毀誉褒貶と躓きにパウロはここでも、これまでも取り囲まれてきた。わたしたちもパウロとは程度の差はあれ、誤解や、つまずきに囲まれています。

わたしたちは人からときに過大に評価される。正直うれしい。だがしょせん誤解です。相手につまずきを与えてしまう。悪い誤解を与えてしまう。だがそれを解くことは思いのほか難しい。しかし何がほんとうのわたしなのか、といわれれば自分でもよくわからないのがわたしたちです。誤解じゃないわたしとは何か。つまずきを与えない自分がいるのか。そういう中で、パウロがしたことは、キリストの声に聞く。聞いて従おうとする。ということだったのだと思います。人生という旅における、嵐や暴風や、漂流の経験といい、生きる中の毀誉褒貶といい、わたしたちの人生にはさまざまな波風が渦巻いているし、いろんなことを翻弄されていく。もちろん生きることは嵐や暴風に遭うことばかりではなく、おだやかな波の中を行くときもある。大事なことは、嵐の時も平

穏な時も、そのときどき、み言葉に聞く、ということであり、聞いて従う、ということなのです。

パウロの回心の出来事は使徒言行録に三度記されています。9章、22章、そして26章と。そしてその三か所を連続して読むと明らかに気づくことがあります。それは、一度目よりも、二度めよりも、三度目の回心の記事の方がキリストから聞いた言葉が多くなっている、ということです。より詳しくなっている。

なぜなのか、と考えると、わたしたちの経験から類推してもわかることがあります。それは、例えば、自分の敬愛する先生から聞いた言葉を、何度も反芻しかみしめているうちに、次第に先生が言おうとしたことがより鮮明にわかってくる、ということがある、ということと相似なのではないか。はじめに聞いた時にはよくわからなかったこと、何度も自分の中で聞きなおしていくことで、こういうことを先生はあの時言いたかったのではないか、ということが示されてくる。「起きて町へ入れ。あなたのなすべきことが示される。」とはじめの時には聞いていたキリストの言葉が、三度目の記事の中では「起き上がれ、自分の足で立て。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そしてこれからわたしが示しそうとすることについてあなたを奉仕者、また証人とするためである。」つまりパウロは、あの回心の時に聞いたキリストの言葉を繰り返し繰り返し自分の中で聞きなおし、これがキリストのみこころ、わたしはそれに従う、という言葉と自分の応答を聞く中で形成していったのです。

パウロは毀誉褒貶を受けて後、パウロたちを受け入れてくれた島の長官であるプブリウスの父親の病を手を置いて癒した、ということだけが報告されています。

使徒言行録には、使徒たちやパウロの癒しの業が奇跡が報告されています。使徒にせよ、パウロにせよ、自分の力で癒しの業をするのではないし、しようとしたのでもない。イエス・キリストの働きの中に、その人も置かれていることを信じて、祈るのです。神の御手の業が働くことを信じて、手を置くのです。

キリストの御声に聞いて、従い、キリストの働きの中で祈る。そこで神の力が働き、癒しの業が起こったのです。

マルタ島での出来事はパウロが虻にかまれるという命の危険を守られたことです。人殺しだと言われたり、神さまだ言われたり、誤解や毀誉褒貶、躓きの中で、パウロのいのちは守られたということが記されているのです。神によって救われたということです。そして神によって守られ救われたいのちが、癒し

の業の中で人々の中で、分け与えられていった、いのちの力がそそがれていった、ということでしょう。神の恵みが働き続けてくださる。パウロは人生の嵐や暴風、誤解や毀誉褒貶の中で神のみ声に聞き、神が働いてくださることを信じて、従っていった。そういう信仰における単純さの中でローマへと向かったのです。